

## 翻刻『悪源太平治合戦』（上）

## 翻刻の会

一、底本には大阪府立中之島図書館所蔵の七行九十丁本を用いた。

二、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次のような校訂方針に拠った。

- 1 本文は文字譜を手掛かりにして、適宜改行を施した。ただし、道行・景事の類、会話の途中等では改行しなかった。
- 2 各丁の表・裏の終わりは、丁数の数字とオ・ウの略号を（ ）で示した。
- 3 仮名は現行の字体に統一した。ただし、感動詞、送り仮名、捨て仮名の類以外の、本文中の「ニ」「ハ」「ミ」は「に」「は」「み」とした。

4 漢字は、一部の異体字を除いては、原則として通行の字体に統一した。

5 漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字、仮名遣い、清濁は底本の通りとした。

6 特殊な略体、草体、合字等は現行の表記に改めた。

7 置字は、平仮名は「ゝ」、片仮名は「ッ」、漢字は「々」に統一した。ただし、「く」はそのまま残した。

8 文字譜の類はすべて採用し、本文の右傍の適切と思われる位置に翻字した。

三、本文の翻刻は、次に掲げる翻刻の会（学部学生の研究会）の会員によってなされた。

金子友香里、木村美咲、楠本真己、高岡令佳、田山幸恵、富澤えり。

文字譜、改行及び本文の最終確認は山田和人が担当した。

本作には、人権に関わる用語が認められる。資料的な性格を考えて原本の通り翻刻したが、人権問題の正しい理解の上に立って活用されることを願いたい。

（山田和人）

遠州夜啼石 山州奴茶店 悪源太平治合戦 豊竹越前少掾直伝

国家の興廢は時運の乗除により。人機の得失に出て成敗榮辱人を殊にす。時は平治元年臘月中旬。左馬頭義朝藤原の信頼が謀叛に与し。都の騒動斜ならざれば。急ぎ静めよとの院宣によつて。安芸ノ守平ノ清盛。二条大宮に陣を取り。四門鉄桶のごとく取り囲む。旗手雲井に翻すヲロシへ夜軍の備ぞ。嚴重なる。清盛（一オ）中央の床机にかゝり。百度戦つて百度勝は。戦の戦ならざる物といへ共。天眼人和を的とせば。百戦百巧一挙に有る事運に乘じ。短兵を以つて責寄る所に。いまだ勝利の沙汰なきは心ならず旁。いかにと宣へば。主馬の判官盛久瀬尾ノ太郎兼康詞を揃へ。所々の攻口いづれも烈敷御大將に。勝つたる兵共指向られ候へば。時刻移さず利運の吉左右あらんは治定。御心安かるべしといまだ詞も終らぬ所へ。院の御所より知せの使イ。競瀧口あはた、敷クかけ来り。（二ウ）扱も郁芳門の攻口に向はせ給ふ通盛公。越中の前司盛俊上総ノ介重清等。敵をはかつて呼引出し失き刃火花をちらし。須臾もたゆまぬ働に敵の軍兵大半討れ候へば。味方の勝利と見へながら只今戦ひ真最中。先ッ御注進申さん為馳参じ候と。いふに清盛心地よげに打領き。先ッは吉ッ左右太義。休足あれと人々もいさみす、みし折こそあれ。

南保三郎国連鑑に立ッ矢義の毛と折かけ。朱に成ッてかけ付ケ。郁芳談天陽明門各攻口敗れしかど。待賢門をかためたる

悪源太義平。古今無双の勇力にて。(二オ) 寄手の大軍共せずかたはし抛立まくり立。或は掴んで人礫千騎万騎も時の間に。風に木の葉の飛ごとくはらりと打ちらされ。味方もあぐんで叩へたり。急ぎ御加勢下さるべしと大息。ついで訴ふれば。

清盛くはつとむくりをにやし。譬鬼神なればとて一人の義平に。ほゑ頬かいて逃廻る腰ぬけめら。聞クもいまはし。まだるい。ソレ。瀬ノ尾。透をあらせずかけ向つて攻付ケ。早く。といらたてに。畏つて兼康は数多の軍兵引具して飛がごとくに。急ぎ行。

跡に人々気をいたため。軍の安否を待つ所に。両手の士率に案内させ。難波ノ次郎経遠首桶携へしづ。御前に(二ウ) ひざまづき。待賢門の攻口敗れしかば。義朝を始め一門の輩。東国へ落行し所に。悪源太義平一チ人踏とまり。三戦神のあれたるごとき勢ひに。防支る者なかつし所に。某忠戦の鋒先を以つて攻付ケ。二条川原にて討取たる此首。実検に備へ奉ると己が手柄をしたり顔。さもいかめしげに相述べ。

盛久瀧口目と目を見合せ。いぶかしながら。通。高名手柄。と器のふたを取りのくれば。清盛とつくとためすがめ。ホウ聞キ及びし悪源太が年シ格好。それとは見ゆれど誠しからず。たつた今迄手いたく働。味方の大軍倦しと。注進によつて瀬ノ尾の太郎を指向ケし間もなく。難波などに安々と(三オ) 討るべき義平ならず。殊に幼少より東国に育し若者。見知つたる者なければ猶以て心得ずと。不審詞に盛久瀧口知つてもしらぬ顔見合せ。コレサ経遠。御辺の手柄相違も有ルまじ。併君の御疑ひも去ル事なれば。義平の首にまがいなといふ証拠があらば出されよと。聞て憚る気色もなく。それはぬ

からず。かく御不審も立ッべきかと。某心付イたる故、慥な証拠は。義平が帶せられし膝丸の太刀。持參致し候と御前に差  
出せば。取上ケて見改め。ホウ。是は誠の膝丸なれ共。品によつて誰しにくれまい物でもなし。況や太刀かたな物いはず。  
是ぞ慥に義平と。証拠に立ッ者なければ治定ならずと念に（三ウ）念。押シかへして成程慥な証人有り。朱雀の傾  
城芙蓉と申ス女は。源太が都へ登し折から。馴染重ねし者なれば。御前シにおいて彼レに見せ。御シ疑ひを晴さん為親方に  
申付ケ。召シ連參れと人を遣はし候と。いひもあへぬに傾城芙蓉。親方諸共參上と告る声々。ソレ／＼こなたへ早く通せと  
有ければ頓てへ御前シへ立出る。

恋の山。情の峠。ふみ分けて。公界する身も恋風は。誘ひ廓にならびなき。名にも芙蓉の花の顔盛の姿露ふくむ。つか  
みからげの八文字。鎧武者の並居る中。おめず場うてぬ玉銚は。関に育し印シなり。

難波次郎声をかけ。コリヤ／＼女。汝は悪源太義平に。ふかく馴染を重ねし由。主人清盛公の（四オ）御前シにて。様子  
包す申上いと。聞クよりきよつと顔眺め。是はしたり。早うこい。とうこいとほの暗りから。仰山そふに呼付ケられるは。  
只事では有ルまいと。胸がだく／＼瘡が登りや氣も登り。現の様にきて見れば。べしてもない事。源太様シに馴初た様子  
をいへとは。髭口そらして能いはれた。ホ、／＼、／＼、不粹。高が男にいき付いて。なじめばいと／＼いとしう成り。互に  
かはるな。かはるまいコリヤいはるでもした事。其外の道行は。ながい事なりやわしやつど／＼得覺ぬ。よし又覺てゐ  
るにもせよ。それ聞て何にさんす。やばなおさんが有ルわいなと。ずつかりいへば傍から手に汗。コリヤ／＼御前シやそ  
りや何事。麗相いはずとお尋の筋。微塵ほこり違はぬやう。（四ウ）とく／＼申あぎやいのと。のつ引ならぬ親方がい。そ

んならざつと咄さら成ルまい。実色里のならひとて。くがいする身の楽しみは。勤つとめの内の誠こそほんの夫婦のかたらひと。我身ワタシの上に覺しへしは。跡にも先マきにもたつた一人思おもひ初はじめたは去年こぞの春。ふげん像ざうの桜さくらの庭見に物群集ものぐんじふの其中そのちうに。深編笠ふかあみに對たいの大小。のつしりとした風俗からマアかはひらしい殿ぶりと。こつちが見ればあつちにも。見て見ぬふりの目遣めづいにこがれ寄ル糸縁いとえんの糸。ひかれて茶やが休床やすみどし初対面しよたいめんから打とけて。しつぱりと詞をかはし互の名所。こまぐといふて別れた其夜そのから。通とひ車くるまの我ワならで君きみに任まかせん恋こひの測はか。深い浅あいはどこへやらほんの女夫めとと馴ななじみ。逢夜あふよ重かさねしかたまりがおなかに（五オ）じつと。ヤア何なんといふ。懷胎くわいたいでもしておるか。イ、エイナ。痞つ地ハルといふ病やまひに成なつて身を苦しめる其訳わけは。どふした事やら此比このはふつたり見へもせず。文ぶんの便りもないわいな。ホウないとて捨て置おかれぬ中。なぜわが方から尋ぬやい。ナア尋ふも行衛ぎやうゑが知レぬ。イヤサとぼけな。わがしらいでよい物か。イヤなんぐの誓文せいもん。わしはしらぬが若もおまへ方が御存ごぞんなら。ちよつとしらせて下さんせ。髭様ひげシ必頼かなムそへ。ア、コリヤぐまた慮外りよくはい千万せんまんシな。そりや何いふと。袖引そでひて。とめる親方おやう繕つくろはぬ。芙蓉ふようが風情ふうぜいを清盛せいせいはつくぐと打眺うちながめ。ヤアぐ女おんな。近く参まゐつてソレ。其器そのはの中を見よと。思おもひがけなき詞ことばに指寄さしより。何心なんしんなく蓋取ふたツてヲ、こは。ヤこりやぐ。こはい事も何なんにもない。ソレ。其首そのくびはそち（五ウ）が馴染なじみし悪源太義平。此難シ波が手にかけた何なんシと。違ちがひは有あルまいがと。おとし付地ウけたる詞も氣かゝり。よく見る程。違ふた死顔しがん。扱つかは忠有ちゆうル御家来が君にかはつて死したるを。見みしらぬ故ゆゑの詮義せんぎよな。何にもせよ大事だいじの場所。此世このよにまします夫の為ためよきに偽いつはりお命いのちを。救すくはん物と心に点つき。ナフ悲しやいたはしや便べんりがなくこそ道理なれ。たつた今迄いまお行衛ぎやうゑの。知しレぬを案あんじる其内そのうちも。ながらへてさへござるなら又逢事あふも有あル物と。思おもひし事もあだ浪なみのよるべ定めぬ身の歎なげに。浅あん

ましの御さいごやと。器うつはの前に身を投なふし消入きへし。やうにぞ泣ければ。

難う波ははいきつて出かし顔。清盛ハルも安堵あんどの思ひ。源太源が首に極れば忠賞ちゆうじやうは追ッてさたせん。又。牛若わつばといふ童。鞍馬山くらまに

忍しのび居ゆるる由。（六才）敵せかれの粉こななれば是以ゆゑて赦ゆるし置れず。立こへて詮義せんぎせよ。猶なほ又また膝丸ひざの此太刀は。我父忠盛しんかう信仰有し。祇

園おんの社やしろへ奉納ほうなすべしといひ渡し。コリヤく女。いまく敷ずは系づ類るゐせずと分ぶん別べつせい。ソレ眼め前に源太が死首。見ながら

生なきては居ゐられまいがな。ホウそりやいはしやんす迄までもない事。夫その敵喰くひ付くても此場で死したい物なれど。年としの間まは儘

ならぬ。親方まかに任まかせた身なりやぜひがない。エ、口惜くわしい恨うらめしい。憎にくみ敵てと尻目しりめにかけ。難な波はを睨にらめ親方ウは。傍そばからあ

ぶく色氣きの毒どくさ。モウ御用ごようもござりませずば。女を連つれて帰かへりましよと。いふもおづく立たちはさへなまめく姿すがたかい取とり

の。夫そならぬ顔夫うにして間まを合あせたる嬉うれしさに。心こゝろいそく打う連づれて。帰かへる芙蓉ふようが花はなかほる。陣所ちんしよは（六ウ）梅うの早咲はやさき

に。勝色かついろ見みせし。凱歌かいどの。声こゑもいさみて三重さんじゆうへ名なも高たかき。

いづくの人の願ねがひをば。かけ初はじめてや今爰いまにやすく生うまゐる、其文字そのもじを。取とりも直なさず泰座寺たいざじ清水子安しみずしやんの觀音くわんおんと。称しょうして是こゝを

尊たうめり。仏ぶつ神しんの。誓ちかひの糸いとも。結むすばれて。とけぬ浮世うきよのさはがしく。参詣さんけい申まうかれくの透すゑを窺うかがふねぢけ者もの。目計めけいり光ひかりる

ほくそ頭巾腰づきんウに大おほだらさすがにも。いはねど夫そと白浪うきやそろりくの足取あしどりりも。驚おどろにはあらぬ昼ひる鷹とんひあたり辺見廻べんみまわりす折しやからに。

住僧ぢゆうそう円覚えんかく前まへの日中にちゆう終はれば珠数じゆずつまぐり。立た出る勝かち手口てぐち。ヤア何者なにものじやと驚おどろけば。イヤ何者なにものは知しれた事。おりや盗人たうじん

の骨張こつちやう。といふて深い望のぞみもない。高たかが散錢さんせんの溜たまりと。布施ふせの有ありたけ（七才）引ひさらへていぬる分ぶんの事。サアくきり

く出でしたり。ハ、ハ、ハ、ハ。はて扱合点しやくがてんの悪あくいお盗ぬすじや。繁はん花はなの地まちの町家ちやうやへははいらず。精進しやうじんくさい寺廻てらまわりりは隙ひまづいや

し。とつと、おいにやれ。イヤいぬまい。町家へはいるは合点なれど此此の騒動で京中は上を下タ。じやによつて寺へしかけた。サアそれが大きな間違。其騒で参詣もなければ此方もかん／＼坊。目利が違ふて笑止千／＼万シ。したるが折角はいつて素口空腹でもないなれまい。責て出端で中食しそれを矩摸に。いんだらそつちはよからふがこつちの虫が合点せぬ。マア一ぺん家捜して。跡で四五はいかこふてこまぞ。茶をわかつて待つて居よと。いひつ、そこら見廻してのつか／＼と奥に入ル。ア、捜さばさがせ。とらる、(七ウ)物も内証の。貯。とてもあらきさんじと。独つぶ／＼くり返す。念珠かた手に見やつたる向ふへ来かゝる。わな帽子。廿計りのぼつとり風顔もくつきり色白な。女子をつる禿頭。親仁めけ共苦有所班なかつげの撥鬢。浴衣がけ成ル旅脇指さしも名高き観音の御前にしばし伏拝み。

有ル家と打連して伴ひ入くる住持の傍。指寄つて小腰をかゝめ。身共は遠州諏訪野原と申所の百姓。名は天シ目の弥源次。彼れめはさめと申て一人り娘でござますが。生れ付いてぐつ共すつ共物いふ事が成りませぬ。そんなら世間に有ル通り。啞聲かといへば其くせ耳は突抜る程聞へるが。どうした事か子が一ッ疋ほしいといふて。此観音様へ宿願をかけたと有。(八オ)ハテめつぼうかいな。惣体子の出来るあんばいは。女夫の中でも至極な所。陰陽和合の理屈でなけりや中々芽作る物じやない。スリヤ観音様がしらしやつた事じやない。それにむたいな願かけたら。観音様も迷惑がつて逆罰を当てさしやろ。よしにせいと呵ても兎角はしがる仕形して見せれば。頑な子が可愛ひと親の身ではいぢらしく。ひよつと観音の御利生で彼陰陽が和合して。西瓜だかへた様な腹に成るまい物でもなし。逆願ひをかけるなら居ながらよりは置キに参つて頼んだら利がよからうと思ふて。わざ／＼連して登りました。どふぞ御祈念願しますと。ひん捻紙の十二燈指出せば。何が扱祈

念致すは愚僧が役。安産（ハウ）の守りもあれ共。申シ子の願ひにはどれ共御符をしんぜると。かたへに入て取り出し。随分とも信心有レと。渡しながら二人が顔。つくく眺て一ト思案。本ノ国遠州と有れば都より遥の住所。早速ながら其計に頼度キ子細あり。何シと聞いてくれられうや。ハア数ならぬ身共等にお頼とはどふした訳。身に叶ふた事ならば何成り共おしやらませと。いふに円覚力を得。イヤ別の事でもない。六七才の児なるが其身出家の望なれ共。二タ親是非に俗でおかんと親子の心一ツ致せぬ故。方々へ逃隠る、先キタを捜すとあれば。又尋来るも氣の毒。何とぞ住家へ連れ帰り。暫しの内かくまふて下さらば。愚僧が悦び此上なし。偏に頼存ると余義なき（九才）詞に打領き。ハリヤ何より安い事。高が坊主になさふ成ルまいの尻がきてからこはい事も何シにもない。連れていにましよナア娘と。いへば合点と領計り。円覚悦び。早速の得心祝致すと奥に入。隠し置いたる牛若君。仏壇のこかげより伴ひ出れば。テモ扱も器量よし。コレ此親仁が預るからは尋てきてもめつたにや渡さぬ。ちつ共氣遣イさしやますな。サアござりませと伴ふて立出る折こそあれ。六波羅の侍イ杉田ノ藤次。若僧一人先きに立大勢引連れかけ来り。ソレと一ト声かくるやいなばらくとふんごんで。捕たくとひしめけ。コハ何事と親子は仰天。かけもかまはぬこちとが狼狽。怪我が有ては成ルまいと。娘引連れとつつかは跡をも見ずして逃帰る。（九ウ）

藤次声かけソレ者共。牛若通すな引く、れ。畏つたとかけ寄れば円覚先きに立ふさがり。牛若の馬若のとめつそうなお侍イ。そんな者はこつちにぬ。外を詮義といはせも立ずあらがふまい。コリヤ其証拠は鞍馬山でよう見覚へたる嚴光坊。遁れはない牛若渡せ。ソレ捌よの声につれ大勢一チ度に寄ル所を。心得たりと牛若丸も守り刀を拔持ッて。切払ふたる小人の。



天性備はる劍術勇氣。円覚も禪おつ取り無二無三に抛立れば。さしもの大勢叶はじと麓の方へ逃けて行。

立戻つて若君をいづくにか隠さんと。うろく見廻しホウ究竟の物こそ有しと。散銭箱の蓋押し明ヶ若君忍ばせあつたふ

た。しめる間もあらしこ(十オ)捕手引連れて。藤次敵光取つてかへし。円覚が両の手をこりや遁さぬとしつかと取り。サ

ア牛若はいづくにおる。隠した所へ案内せいと引立る。イヤサ今の騒動にどつちへ逃ケたる愚僧はしらぬ。ヤアしらぬとて

濟そふか。うせいくと引立て。奥の間客殿くりめんさう。ばつたくとかり廻す。

庭の隅より仏前シの盗人。そつと立出散銭箱。やつちやしてこいよいもふけ。忝しとひつかたげ。脇目もふらず一筋道急

ぎてこそは。三重へ名にしおふ。

相坂の関と申すは日本シ四関の第一にて。要害堅固に備へたる主馬判宮盛久が山館。守り敵敷二三の木戸。廻りに兵具

立テならべ風も通さぬ構なり。

遠見の役寝すの番。一ト時かはりの時計に合せ。難シ波ノ(十ウ)次郎経遠が郎等杉田ノ藤次。主人に先キ立チ番所にかゝり大

帳扣へ。ヤア者共。当時平家の権勢尖く。洛中の軍を鎮め敗北したる源氏の奴原。ぬけく東国へ逃ケ下らんと。或は

願シ人シ商人など。往来は男女に限らず。帳面に記すへしと院の庁の嚴命。随分油断仕るな。先ツ往来を通せよと。下知に

従ふ下モ部共木戸を開いて呼出す。御免候へ私は下モ立売りの小間物や。築地のお出入又撰家方。親王姫宮比丘尼御所。ど

こも軍がはやるやら。お召シなさる。道具には先ッ甲がけ鎧形。蹀輪ちがひ花うつは喜悦の。眉掃鉄奨筆。お奴方は油

墨。真狐の黒焼黒元結。其外数々近江路へ罷りこしさげさせる筈。召シま(十一オ)せいとぞ売て行。跡へさがるは嵯峨の

者。戴入送つて伊吹山。一ト日二タ日のさし艾。三里の先きは程近しと名乗て廻る時鳥。次に見へしは俗山伏。順逆わかぬ斎料に錫杖ふつていかめしく。さすが巫やら出ツ家やら衣を着たは鉢たゝき。頭巾の下は撥髪奴。日向生れの伊勢参り。作染浴衣一チ様に。波間の月を三井寺へ。礼を納る順礼や。車遣は鳥羽の者。しるもしらぬも相坂は。木の丸殿にあらね共。名乗つてこそは通りけれ。

杉田は一チ々書キ留め。盛久殿に伝へと下モ部引具し立て行。実守り人の。隙もがな。人目の関を盛久の秘蔵娘の常世姫。誰に心を奥の間の遠見の亭に立出て。袂より一チ軸の掛地取出し柱にかけ。香をくゆら（十一ウ）せ合掌の念殊に余る涙の色。袴の幾重もしめやか成ル秘共声々に。是はしたり常世様。いつの間におはづし。取り分けて此比はうきく共なされぬ故。琴三絃でいさめても。間がな透がな爰へ来て。何なさるゝと指覗き。是は扱守り本尊の御絵でもなし。彩色した浮世絵。美しい前髪が馬に乗つて居る所。此掛絵にしみぐと涙ぐんでござらしやるは。どふした事と尋れば。姫も涙の顔を上。恥しながら此掛絵が。自が思ひの種。源氏の大將義朝様の御惣領。義平様のお姿ぞや。去年の春鎌倉より都へお登有りし時。馬上ゆゑ敷キ供廻り都入のはなやかさ。其折から自も。此亭よりふと見初天晴御器量殿ぶりやと。思ひ初メても片便り。（十二オ）文して申さん伝もなく。せめてお姿計りなど肌身にそこへて起臥の。夢の間タの楽しみとくる月の徒に。源氏の運の拙くて待賢門の軍も破れ。親子御共にちりぐの中に床敷キ義平様。難波ノ次郎が手にかけて討しと聞クより気も落て。夜ル昼わかぬ憂思ひ今では是を箇共。ウケ暮レ忍んで此様に。御回向申て居る内も心が心に通じなば。必。未來は夫婦ぞと思ふて給はれ義平様と。掛地を身に添いだきしめ声をも。立ず伏しつめば。お道理様やと諸共に女

の情の囁ひ泣。跡は笑ひを催して俱に機嫌を取り々に。難波次郎経遠様。只今お出としらす声。ソリヤ又毛虫が来たといひ。お姫様見ら（十二ウ）れぬ様に。サア／＼こちへと打連して一ト間にへこそは入にける。

程なく時計の八時半時。聞クより入来る難波ノ次郎。盛久も出迎へば。先刻より嘸お待ち遠。先達ッて雑兵歩徒の者は。

閑所違変なく通すやうに仰渡されしか共。或は名有ル武士共。雑兵なんどに紛れ通るまい物でもない。雑兵駈武者成り共半時一ト時とゞめ置き。急度吟味致すべしと改めての御詮。其旨心得らるべしと。いふに盛久打点き。尤の御裁配委細承知仕ると。挨拶夫へ関守りの目顔を忍ぶ雑兵二人。陣笠眉深に來か、れば。

下モ部共声をかけ待テ／＼と留める内。難波ノ次郎つく／＼見廻し。何国より何方へ通るやつ原。国所名苗字を明イ白に申せ。子細なくば通して／＼（十三オ）れうと咎られ。先成ル男両手をつき。うららが在所は美濃の大垣。奉公林に登たれば思ひも寄ぬ軍がおこり。一日を二百宛あつち飯にあつちの鑑。ゑい／＼おうに雇れ物二日と立ぬ内。源氏方の負に成り日雇賃には此鑑。迎都の住居はならず。古郷へ錦を思ひ出し此儘で帰ります。お通しなされ下されといふを打けしならぬ／＼。今日より念を入。雑兵にもせよ半時一ト時留め置き。吟味せよと厳しき仰。今鳴ッたは八時半時。暮レ六つ迄

待チおらふと。睨ちらせば盛久ひつ取。わが云訳は聞へたが。今一人は何国の者。見ればまだ若輩なやつ。身は盛久といふて当所の関守。今難波殿申さる通り御上意なればもだしがたし。我国所早ク（十三ウ）申せと。いへ共とかく指辰き。答なければ。イヤあの男もひとつの在所。一ッしよに連立参つたれどあいつには年寄ッた母親がござります。夫レを養ふ為なれば一ト足も早ウ帰り。顔が見たいと申せば孝行といひ不便も有。爰は了簡遊ばされ私一人留置カレ。彼めはお通し下さ

れいと。願へど聞ぬ難波ノ次郎。理非を分ぬも関所の掟。盛久は氣の毒ながら力及ばずもつけ顔。詮義を脇へちらさんと。  
 イヤなふ難波殿。いまだ貴公には妻女もなく独身と承る。幸い盛久が娘常世と申ス者お氣に参らふか存ぜね共。婦妻に迎へ  
 下されなば拙者が本シ望。当家侍分に誰れ有ふ。肩をならぶる者もなき貴殿シ。(十四才) 承引なされ下されまいかと。  
 あがまへ詞に付上り。是はく御挨拶。此度の軍にも鬼神と呼れし惠源太が首取ッて。日本に名を顕はし。院の御所を始メ  
 我君の感状にも預つたる某。聶に取られても不足は有ルまい。貴殿も盛の一字を給はり御公達の後見もなさるれば。舅と  
 敬ふても人の笑はぬ事。併侍の女房はみめ像より才覚が第一。すはといふ時はお馬の先きにすゝみ。雑兵の首でも  
 取ル程の覚がなくては武士の妻とは申されぬ。勇者は種に顕はすとやら貴公の育がらといひ。奥床しう存る。が美くしい  
 器量より心の器量は何シとでござるな。承はつた上の事と。寝耳に水の底意には笑を。隠して落付キ顔。是は御尤。(十四  
 ウ) 子は嬰孩より教婦は始メて教とあわ共。大まかな爺親育終に彼めが心は様さず。ヤ幸イの事こそ有レ。常世を是へ呼  
 出し彼レ等二人か詮義を致させ。才智の程を試まいと。いへは図にのる誰彼ノ次郎。重量く上分シ別。然らば互に休  
 足かてら。詮義の仕様を見ン物致さん。万シ事は後刻と言捨て番所を。立ッて入にける。  
 ヤア誰レか有ル。娘にこよと呼つがせ。立出る。常世姫。父か前に手をつけば。ヲ、呼出すは余の義でない。子細有ッて彼レ  
 等二人が詮義をゆづる我レにかはつて仕れと。思ひがけなき仰に恔り。父上のつがもない。女子同士でも有ル事か。男御の  
 詮義するに姫ござのあられもない。此義は御免シと諾も聞ずそふ有ふ(十五才)と思つたれ共。武士の娘は武士の夫トに添  
 ねばならぬ。そちも名有ル侍に娶せんと早約束致したれば。兎角はない娘が賢愚の程試たい。ヲ、いかにもと請合た。

イヤサ何をおどろく。いつ迄親が手を守ふと思ふ馬鹿者。何かはない彼レ等が詮義の落着次第。身が分<sub>ハル</sub>別<sub>ハル</sub>しておいたと。きめおふちやうに詮<sub>せん</sub>方<sub>かた</sub>も否<sub>いな</sub>といはれぬ親<sub>いん</sub>の氣質<sub>きしつ</sub>。是非<sub>せいひ</sub>も姫<sub>めい</sub>く振袖<sub>ふりそで</sub>の詰<sub>つめ</sub>ひらきせば我<sub>わ</sub>カ縁<sub>えん</sub>の。定まるも憂難<sub>うちなん</sub>題<sub>だい</sub>と。案<sub>あん</sub>じながらも座になをる。

ヲ、出かしたく。身は一<sub>ハル</sub>ト間に休足<sub>きうそく</sub>せんと心をへ残し入跡<sub>いりし</sub>に。女風情<sub>おんなふうしやう</sub>の。詮義<sub>せんぎ</sub>役<sub>やく</sub>。庭<sub>にほ</sub>の二人も顔見合せ。少し力<sub>ちから</sub>を得ながら底氣<sub>ぞん</sub>味<sub>み</sub>悪<sub>わる</sub>く扣<sub>ひか</sub>へ居る。姫は心を落<sub>お</sub>し付<sub>け</sub>。ナフ二人の(十五ウ)衆<sub>しゆ</sub>。聞きやる通りの訳<sub>わけ</sub>なれば辞退<sub>じたい</sub>もならぬ父の御意<sub>み</sub>。サアどれからどれへ行<sub>い</sub>く者とありやうにいふたがよい。そしてマア不遠<sub>ふえん</sub>慮<sub>りよ</sub>な。着<sub>き</sub>やつた笠もぬぎやいのと物<sub>もの</sub>やはらかに問<sub>と</sub>かけられ。ハ、ハツト一<sub>いっ</sub>チ度<sub>ど</sub>に取<sub>と</sub>ル笠<sub>かさ</sub>の。下はこがる、恋人の義平<sub>ぎへい</sub>様<sub>さま</sub>にてましますかと。思<sub>おも</sub>ひがけなき驚<sub>おどろ</sub>きに。俱<sub>とも</sub>に驚<sub>おどろ</sub>く二人がそぶり打守<sub>うちまもり</sub>りく。ほんにおまへは義平<sub>ぎへい</sub>様<sub>さま</sub>。やつぱりおまめで居給<sub>ゐ</sub>ふかと。寄<sub>よ</sub>んとすればア、申<sub>まを</sub>しく。微塵<sub>みじん</sub>も左様<sub>さやう</sub>な者でなし。義平<sub>ぎへい</sub>とやら公平<sub>きんぴら</sub>とやらは大兵<sub>だいへい</sub>。見た事はござりませぬと。まじめになれば声<sub>こゑ</sub>をひそめ。何<sub>なん</sub>ばお隠<sub>かく</sub>しなされてもよう見覚<sub>み</sub>へてゐる其訳<sub>そのわけ</sub>は。過<sub>か</sub>キし都<sub>みやこ</sub>の驕<sub>おご</sub>の時<sub>とき</sub>。馬上<sub>ばしやう</sub>でお通りなされしを。アノ亭<sub>てい</sub>から見<sub>み</sub>(十六オ)そめしより。人にしらすぬ物思<sub>ものおも</sub>ひ。お姿<sub>すがた</sub>を絵<sub>え</sub>にうつし明<sub>あ</sub>くれ祈<sub>いの</sub>しかひ有<sub>あ</sub>つて。ありしにかはらぬ御<sub>ご</sub>ン粧<sub>まは</sub>ひ。爰<sub>ここ</sub>ではないかと嬉<sub>うれ</sub>し泣<sub>なみ</sub>。抱付<sub>だま</sub>きたうも役<sub>やく</sub>からのそ<sub>そ</sub>ろ心<sub>こゝろ</sub>に見<sub>み</sub>へにける。

二人は鞆<sub>たづな</sub>興<sub>きやう</sub>さめてなま中<sub>なかつ</sub>それとしられては。身<sub>み</sub>の大事<sub>だいじ</sub>ぞと空<sub>そら</sub>とぼけ。私共<sub>わが</sub>は田舎<sub>いなか</sub>生<sub>な</sub>れ。奉<sub>ほう</sub>公<sub>こう</sub>梓<sub>そう</sub>に参<sub>まゐ</sub>りし者<sub>もの</sub>。馬<sub>うま</sub>の口<sub>くち</sub>は取<sub>と</sub>つたれど。乗<sub>の</sub>た覚<sub>おぼ</sub>はさらくなし。お慈悲<sub>おひ</sub>に通<sub>と</sub>して給<sub>たま</sub>はれと逃<sub>はな</sub>げし支度<sub>しど</sub>する計<sub>はかり</sub>なり。常世<sub>とこよ</sub>の前<sub>まへ</sub>は傍<sub>そば</sub>により。モウどっちへもやりませぬ。父上<sub>ちやうじやう</sub>に願<sub>ねが</sub>ふて見て。誠<sub>まこと</sub>ならぬとの給<sub>たま</sub>はる。自<sub>みづか</sub>ら部屋<sub>へや</sub>にいつ迄<sub>いつ</sub>もおかまひ申<sub>まを</sub>ス覚悟<sub>かくこ</sub>。それはいやかへ。そんな

らどふでもいいたいじやな。サアそれ程にいたくば。わしも（十六ウ）一ッしよに連れていて。殺しなりとどふなりとしたいやうにと計りにて。思ひ詰たる真実のほに頭はれし花すゝき。落人の身の心置キ何といらへも春の日のあたりまばゆく見へにけり。

ム、わしに計物いはずどふでもいやでござんすな。折角思ひ思ふても嫌はれて何面目。未来得待つて居ると刀に組れば。コハ逸怯。イヤ／＼殺してくださいせ。日外お討れなされたと聞きた時は自も。俱に死んと思ひしにながらへて居たればこそ。けふ優曇花の御対面。たゞ一ト言のいなせさへ難面の君やと縋り付キ。声も忍びのしめり泣。涙は落て草摺に。露置キ添る風情なり。

義平公は悠々と下モ（十七オ）部の姿其儘におめる。方なく座を改め。かく迄我に情の上疑ふべくはあらね共。名をあかされぬ子細あり。此度味方の敗北に我レも討死せん物と。既に覚悟を極し所。是成ルは八丁礫の紀平治とて源家相伝の弓取り。則チ彼が弟志内の六郎。前髪立を幸いに我にかはらせ。悪源太義平こそ。難波ノ次郎が討たんなれと。世上に隠れなき上はいよ／＼慎身を忍び。東国へ落のびて重ねて本意を達する存心。世を憚る我々故すげなく見せしは智略の一トつ。世になし者の義平に命を捨ての心ざし。何として忘れ置べきぞと。仰に紀平治詞をそへ。行先キ々は敵の中爰は一ト先ッ引わかれ。時（十七ウ）節を待つこそ実の心。今暫くの辛抱と有すかする折こそあれ。

難波次郎杉田を引連れつつと出。ヤア義平主従見付けた／＼。きやつばらをひつく、り常世諸共引立テよと。詞の下より杉田ノ藤次縄をか、れとひしめいたり。

ヤア／＼兩人過有リなど。声をかけて主ジの盛久。小庭の方より走り出杉田を突退押シかこひ。イヤサこれ経遠殿。悪源太義平は。日外二条川原において。御自分が首を討チ院の御所の御覧に入レ。清盛公の御褒美に預られたではござらぬか。成ル程／＼。夫レに又此雑兵を悪源太とおいやれば。ム、ム、ム。先キ達ッて指上たは鷹首にて。清盛公を始め院の御所迄。扱は御辺（十八才）が欺しな。ナアそれは。それはとはどこへ／＼。主君を掠る不忠の侍イ盛久が縄ぶつて。六波羅の御前シへ引ク腕を廻せと詰かくれば。ア、誤った／＼。きやつを義平といふたは成ル程拙者が不調法。真正銘交なし雑兵に極つた。ム、しかと夫レに違ひはないか。ハテ此難シ波目利じや物。毛頭相違は少共ない。ム左様ならば言分シないと。いふに経遠しかな顔。常世の姫は嬉しさに胸なでおろす計なり。

何思ひけん盛久はずつと寄て義平と。娘を左右に引とらへ木戸より外へ投出す。コハ何事と難波次郎。杉田も俱に騒共見向キもやらず跡びんしやり。雑兵めらが詮義。中々女童が手くさいにて。関所では（十八ウ）落着せまい。古郷は美濃の大垣とやら。彼レが住家へ伴ひ行。とつくりと見届い。今一人は半時の間此所に留め置キ。跡から帰す早行ケと。思ひがけなき父が情。ム、スリヤあの人にわたしを付けて。ヲ国所の吟味にやるのさ。若分明にしれずんば二年シ三年シ。乃至五年シ十年シ友白髪に成ル迄も戻るには及ばぬ。併詮義相済迄は清盛公への聞へも有ル。何国に居ても音信不通。ナ。そふ心得てくれおれと立派にいへど目は涙。忝い共嬉しい共心詞の御札は。いはねどしるき親の慈悲。義平公も紀平治も。智仁勇備の情をかんじ互に。詞も口ごもる。

難シ波は以前シの誤りに手ざしならねば杉田ノ藤次。どふやら胡乱な此場の（十九才）扱。今一チ応吟味すると。立寄ル首

筋紀平治が。片手に搦で引戻し。いかれぬ下郎の出しやばり立テと突飛し。早く盛久も。胸すれば難波ノ次郎イヤサコレ舅殿。貰ふて置いた常世姫付てやるとは心得ず。おれへの返事はどふせらるゝと。いはせも立ずされば。最前も申すごとく。娘が才智を見よふ為。落人共が詮義にやるが御自分の目にかゝらぬか。帰り次第相談致さふや。またそこを動かぬか。何じや旅の用意に笠がほしい。幸い爰にと脱置し。二つの陣笠拾ひ上ケ。生れてよりけふが日迄一寸外へ出おらぬやつ。道中すがら不便をかけ。突放さぬ様に。頼ムぞと。

恩愛親子の別れの雨。笠を投ケやりしほくと。涙隠して入ルかげを。伏拝み（十九ウ）。戴く笠の内に迄籠る情のト包。袖のかほりや二人連レそこはかとなく出て行。跡見送つて紀平治がイデ。御供と身纏ふ。難波は何がな腹いせにせめてきやつめを引くゝり。落武者共が白状させよ。畏つたと杉田が裁配者共来れと下知すれば。

伝手に得物の長道具ふり廻し。遁さぬやらぬと取りまいたり。紀平治すくく小跳りし。相手のほしい胴中へ打揃ふて御太義千両。命の長柄に運のつくぼうやつばらと。百術千慮の手をくだき右往左往に三重へなぎ立れば。

さしもの多勢たまり兼。主従しどろに打なされ残りはばつと逃失けり。言がひなしと我武者の藤治。引返し切かく（二十オ）れば。しづんで後へもんどりうたせ。すぐに腰骨ひしぎ付ケ。性こりもなき人非人。不足なれ共難波がかほり。時計のかほりも己が天窓。七つの数にくはつちぐはち。一つ二つは杉田の藤次次手に命を暮し六つと。水もたまらず首打落

し。相手なければ是迄と夕附鳥のとりに。我も主君の御跡を追分過きて大津の町。八丁礮が名も高き音も。爰に走井の。源氏に仕ふ身は。仁有り義有信有。虎口の難に相坂の。関を遁るゝ武勇の徳。ナン海西海東海道味方を。



中ナカ立タテ。中ナカ集ツミめ。頓ツムて敵テキをせめ鼓ツミ。汚ケガレ名ナを雪ユキぐ晴ハレ軍ヒロイ家の向ムカ旗ハタ打ウ磨ミ。再またび御ミ代タテに近ウ江エ路ロと悦よろこび。勇いさ出でて行い（二十ウ）

## 第二

中ナカ重ヘ一ヒトト重ヘ。都ハルの花ハナは。恋コイ衣イ。きつ、馴なれ初はつ逢あひ初はつメて通ウひ廓くわの道ハル筋すぢは。粹すいも不ふ粹さいも一ヒト啜なほ柳てウキンの糸いとに。ひかれくる朱しゆ雀せうの。町フシぞ賑にぎはしき。

目め馴なれぬ事コトで人ひとをよせ是これはと人ひとに手てを打うタす。大お門かどシ口ぐちの一ヒト趣しゆ向かう柳りやうのかげに立たテたりし。一ヒト枚まい札ふだの高かう札さつは似に合あぬ所ところの禁きん制せい

札さつ。花はな折うラするが商しやう売ばいを折はルなど書かキしかや見みよと。立ウ寄きルぞめきは遠えん慮りよなく。ハア、書かいたは。ムウ何なんじや。一ヒト文字ぶんじや

の芙蓉ふようといふ大夫たふ。客きやくをふり勤つとめをせぬ故ゆゑ。女郎じやう仲な力ちから間まへ見みせしめに。札さつ一枚まいを五十ご宛えんの富とみにして。当あたりし方かたへ遣はす

（二十一オ）者ものなり。ハア、出来できた。神じん武ぶ以い来らいない図ずな高かう札さつ。請まを出ですと。五百いほ両りやうの七しち百ひゃく両りやうのといふ大夫たふを。錢せん五十ごで手てに

入いルはたゞ取とルより安やすい物もの。したがきやつ内ない証しやうは小こ野の々々小こ町ちやうか蛤はまぐり門かど。あかずでは有あまいかい。さればなア。若もしそれなれば

錢せん費ひし。傾けい城じやうと珊さん瑚こ珠しゆは。何なんじは産うぶが結けつ構かうでも。穴あながなけりや用もちに立たタぬ。ヲ、それ〱と仇あだ口ぐち々々笑わらひてこそは行い過へる。

鴈かりが飛とべ石いしが亀かめもしだんだ仲な力ちから間まの薦こもかふり。跡あとに残のこりて大おほ欠くちび。ヤイ夜よ明あけケよ。女おんな郎ぢやうを富とみにすると高かう札さつが立たたれば。兎と角かく欲よく

と色いろの世界せかい。大おほ抵ていや大おほ方ほうの人ひとではないが。ちぎ文ぶんもくれぬぞよ。ヲくれぬ〱。こちとは新あたらまいの乱みだれなればかこひやうが

悪わるル（二十一ウ）いかいなイヤそふもいはれぬてや。そこに居ゐるやくざめも二三さん日の新あたらまいそふな。見み〱ごと当あたりがよいや

らして。きのふもどて丁てう半はん十じゆで富とみの札さつを入いれおつた。ヤイ若もしあの大おほ夫ふが当あたつたら我われはマアどふするぞい。エまだなやつらじ

やなア。此こ身みに成なつたりや腹はら計はかりりか。どこやらもひだるい故ゆゑ。折を々々の虫むし養やしなひ。其その内うちに方かた々々へ賭かけ六ろくのたまにするはい。めんつ

を売った五十の銭。当テがなふて入ふかい。追ッ付ケ小判といふ物を。大分シ儲る待ッておれと。雲を当テなる高咄し。夜明け日暮し新まいと。付いた異名もあてどなき七八千の札入群集けふが則チ札びらきと。押シ合せり合犬の蚤。囃当テよかし突当テよと(二十二オ)かた唾を。飲でひかへ居る。

おろせ末社も立騒ぎ。響の親方傾城芙蓉を引連れて。富の箱を男に荷はせ柳の本トにとつかとおろさせ。高見へ上つて才兵衛が一問シ計の錐振廻し。抑此富と申スは。堂塔建立の爲にもあらず。欲しん徳用の勝手にも仕らず。女郎一人もて余した。隙やるも惜さの余り。一トつには廊中。氣随働く奉公人への見せしめ。客をふつたる報の罪。車の輪と申せ共。今は錐の先きを廻くと。富に突てお手に入る。あんがう鴉を見る様に。口明いて計りござらず共。信を取ッて錐の鑢玉。上る様に祈念あれ。イテヤ諸人の迷ひを(二十二ウ)はらさん。南無婦命頂札と。箱の真中くはつたりぐつすり。突当テたる札一枚。サアく今が恵方果報。ひいきへんばみつちやもない大夫殿。主シはどなたじや此札と。錐の先きにつらぬき見すれば。大門口。野ぶせりの非人新まいの八と読も終らず傾城芙蓉。ハツト計に泣倒れ。暫し。消入ごとく也。数多の見ん物口あんごり。五十捨た百捨た。一貫棒に振舞て裸に成つたとつぶやきながら。皆ちりぐくに立帰る。

才兵衛は芙蓉を引立。何んぼ泣いてもモウ叶はぬ。乞食の女房にして。五器提させるがこつちの腹いせ。八めはいか果報者。どこにおるぞと見廻せば木影より手をすりぐ。(二十三オ)あんまりで恟り致し。臍玉が飛ましたと。薦衿繕ひうづくまる。仕合者め連れて行ケと。芙蓉を取ッて突やれば。ノウ情ない親方様シ。折檻異見の仕やうも有ふいかに憎しみあれば迎人にしられたわしが顔。群集の中でむごたらしい薦かぶりの女房とはあんまりじやはいなどうよくと。恨歎けばせゝら

笑ひ。ソリヤそちが根性から。悪源太へ心申中立テ外カの客を勤め故。呼出しなければ身請ケももとより。又外々の色里へも廊中の沙汰聞イテ。売かへられぬ余り者乞食にはてうど相応。細言いはずとつと、いけ。八めも連れて行おれと。いはれてやつちや忝し。サア女房共おじや(二十三ウ)いのと。歎く芙蓉を肩にかけおのが小屋へと急ぎ行。

才兵衛跡を打眺め。心からと言ながら。思へば不便と見送り。下人を連れて立帰れば。跡に残りし二人の非人。ナント夜明ケよアレ見たかい。一万シ近うも有ル札に。たつた一チ枚の八めに当たるは。よくの仕合者。酒などかはしてこまそふこいと打連レ。かしこへ入ル日影。

時にはあはねば我れも又俱に日かけと歩く。はんちや合羽の袖せばく浪人めきし侍の。旅はあてども長暇柳が本を行過る。

跡より付くる以前シの非人。申シ。コレ申シと。呼かけられて旅人は見返り。路錢も不自由な瘦浪人。付クな。と行をなをしもア、イヤ是申。其願ひではござりませぬと。間近カ(二十四オ)く寄ルをよく見て。ヤア。こなたは兄者人。紀平太殿。コハエ、情ケなき身の果といふもしほる、目に涙。こなたは猶もつゞれの袖。絞ながらに手をもみ膝すり面目もなき。今の対面。

此ざまに成たればしるべは本トより兄弟にも。隠れ忍ぶ筈なるに。恥を思はず呼かけたは。少ト其元トへ願ひの筋。聞キ入てくれられうや。全く。合力無心にあらず。先非を悔ての願ひぞと思ひ。入てぞ見へにけり。

イヤ其礼儀は私めが致す事。斯浅間敷御身とは。しらで暮せし残念さよ。併兄の御身にて。弟の紀平治に御願ひとは勿体

なしと。いふに紀平太猶も手をつき。イヤコレ御自分は弟と言ながら。親の苗字（二十四ウ）を請ケ継。我君に仕ゆれば親人も同然。弟とは思はれず。父と存じて一ト通り申シ上る聞イてたべ。我レ若年の昔。不忠不幸の働有ッて。御シ怒の御勘氣蒙る。方々とさまよひ身の竹もなき故。遠州諏訪野原において。天目の弥源次といふ百姓の方へ入聲。名を。門八と改め無念の月日を送る所に。思はずも都の騒動。主君の御シ大事と聞や否や。シヤ我カ運の開ける時とかけ登ても跡の祭り。義平公には早討死。源氏の運は尽たるかと悔どかひのあらばこそ。夫レより人目を忍ぶ為子細有て此非人。御辺親人に成りかはり。勘当赦すと有ならば心の闇も晴ぬべし。願ひとは此（二十五オ）事と。語るを聞イてハア御尤。ヤモ拙者も其心付カぬにはあらね共。勘当したる兄。紀平太。一トつの功を立てぬ内。兄弟とばし思ふなど。御遺言は背がたし。存生の母の手前。旁以ッて私には赦されずと。いふに点きヲ、さも有りなん。イテ紀平太が一トつの功おことに見せんと片かげより。傾城芙蓉を呼出せば。ノウ珍らしや紀平治様。主シの便も聞キたうて逢たかつたと立寄れば。先ッ其兄にも御案体。シテ此所にはどうしてと。問れて芙蓉は。涙にくれ。

義平様に別れてより心は心ならね共。おなかにやどしたや、様を。どふぞ御無事に産落し。其上ではともかうもと。思ふ内に（二十五ウ）もせつなき勤。客をふるの嫌ふのと親方の打打擲杖棒うけた其あげく。富にせられて思はずも紀平太様のお手に入。憂を凌げど凌がれぬは。義平様に逢たうてやるせがないと縋り付キ声をも。立ッ泣居たり。

紀平太も涙ながら。御懷胎の芙蓉殿の問も人手には置カれず。殊には平家の問へを恐れ。御シ行来のござる所を隠さん為。斯浅ましき姿と成り。親方才兵衛と馴合。我富札に突当テしは。勘当願ひの詫の種。これ聞入有ッてくれられよと。いふ



ず。一ッ旦立こへ対面遂。夫レより御行衛尋申さん。首途に血祭のがらくためらと二人が一ッ度度首拔キ捨。追ッ付ケ平家の一ッ門をまつ此ごとく本ッ望とげん。先ッ夫レ迄はさらばく。こな様ッまめで。おまへも堅固に。主ッ様無事の便りを待ッおさらば。さらばの暇乞柳の糸の。もつれ合たる兄弟は引。わかれてぞ三重（二十七ウ）

道行梅の陣笠

山一風風立さはく。世に連て。ちりくくと成ル木のはかな。源一の義平は。待賢門の夜軍より都を。出て相坂の関の戸ざしを盛久が。情にゆるむおのづから。笠もふかくを取りし身の。従ふ者も遠近に父の行衛や弟の。在家もしらず落武者と。成り行世にも。近江なる。志内が方へと心ざし。かちをへたどり出給ふ。御有様ぞ。わりなけれ。逢もうし。逢ぬもつらき恋すてふ。我レはまだねぬ。常世姫。おくれし道を走井の。水もらさじと契りても。心はとけぬ玉（二十八オ）櫛笥二人りは行どかたぐに杖よ。草鞋よ引しめてしども嬌くふり袖に鎧の袖をくらべては。都のふじの。日枝風残の雪は。ちらくくと裾に鹿子や。打出の濱。千船百船漕連て。世をうみ渡る浦々見れば。夫は網ひく婦は麻苧の営によるべの。方の磯枕。殿持チ顔に帰る雁。羽打かはし二つ三つ。四つの緒かけて。びはの海包む霞の晴間より。もれくる鐘は三井の寺。古郷は跡に。父上の。情とぎりの梓弓引にひかれぬ義平は。芙蓉が事をくよくと。案じ詫ても。それとだに。心にかたき縷帯。さしもにたけき。武士の。恩愛深き湖の。底意を包おはすれば。（二十八ウ）姫は何シの気も付カず思ひ。初たは去年の春。又も初ッ春立ッ年シの。始め思へば中カく。にあふてつらさの勝り草比は七種初ッ若菜。薺く。と。打はやす賤が門田は賑々と。軒場くの注連かざり子の日にひかん松本の。里の童が誘ひ連し。あすはお立かくお名残おしさは

限りなや。せめてわたしがお供で草津の茶屋迄送りましよ。やんれおかまひ有ルなノフ。わかれの涙がでんこそへ。おせ、でないやい。ヤレ／＼涙がでんこそへおせ、ゑ。うたふ声／＼身にしてみてうかむ涙のもろこ川。ながき旅にはあらね共。心づかひに道（二十九才）ばかもゆんでに見ゆるひもろきは田畑の宮と聞クからに。我も兄弟主従が再びめぐりあふ事を。守らせ給へと伏拝み。神にさゝぐる飯炊く。粟津が森の松原に梅が。火ともす未開紅するどき鎧梅芽を出す蘆。行を乱せる鳥井村。敵の伏勢ござんなれ。寒紅梅を平家になぞらへ。東風吹ク風は味方の軍兵。彼唐士の白顔帥軍を治めて帰朝の時。梅を折つたる其例今義平が魁して。いざや太刀恨んと躍上つてハツシと打テば。條はかしこに。ちるは非常の花々敷キ。前後の備に隊伍を守り。揃ふ矢橋（二十九才）の順風船はる武者歩武者騎馬武者は。驛路の鈴に勇をなし堅田の浦の。遠干渴是ぞ囊沙の謀。行なる雁は孔明が。八陣の図に等きと。古詩を吟じて行ク先きは。瀬田に入日のまばゆくて斜に。覆ふ笠のはも。空は春めく旅衣。着つ、馴たる。恋の道廠が指にべにさして。鉄漿も祝はん薄化粧。今宵の宿を新枕。二つならべてさゝめ言。あふて語らん嬉しさに先キへ。急げば跡に成り。招けば招く百千鳥我にたぐへて鳴音かと。いと。ゆふぐれの山々は。笑ふがごとく久かたの月の詠の名所ロや。頼みはおもき石山の辺に。こそはへ着にけれ

（三十才）

ひとかた。ならぬ。物思ひ。よるべ定めぬ憂ことに。近江ノ国石山寺の片辺に。人の目立タぬ一構八丁礫兄弟が母の阿栗。末子志内ノ六郎を引連退し隠居屋敷。子供は都へ軍の供。凱陣を待ち兼て目かいの見へぬ物案じ。琴の秘曲をうさ忘れ。京も心もとけぬらん。

下女<sup>地色中</sup> 姫<sup>こしもと</sup>は立つどひ看<sup>かん</sup>経<sup>きん</sup>前の御<sup>み</sup>明<sup>あかし</sup>も。光<sup>か</sup>り輝<sup>か</sup>く内<sup>うち</sup>仏<sup>ぶつ</sup>檀<sup>だん</sup>。焼<sup>や</sup>香<sup>しやう</sup>薰<sup>かう</sup>らせ老<sup>らう</sup>母<sup>ぼ</sup>の前<sup>まへ</sup>に手<sup>て</sup>をつかへ申<sup>まを</sup>かみ様<sup>さま</sup>。此<sup>こ</sup>間<sup>かん</sup>から看<sup>かん</sup>経<sup>きん</sup>もなされず。琴<sup>こと</sup>計<sup>けい</sup>りをお弾<sup>ひ</sup>なされてござるのは。お心<sup>こころ</sup>が若<sup>わ</sup>力<sup>りき</sup>やいでおめ<sup>おめ</sup>でたう存<sup>ぞん</sup>ます。ホ、ホ、ホ。皆<sup>みな</sup>の手<sup>て</sup>前<sup>まへ</sup>も恥<sup>はづか</sup>かしい。目<sup>め</sup>が見へてさへ年<sup>とし</sup>シ寄<sup>よ</sup>りは仏<sup>ぶつ</sup>いぢりが仕<sup>し</sup>事<sup>じ</sup>なるに。そち達<sup>たち</sup>チが折<sup>つ</sup>々<sup>ま</sup>の爪<sup>つま</sup>音<sup>おと</sup>。羨<sup>うらやま</sup>しさに(三十ウ)やつては見<sup>み</sup>れど。若い時<sup>とき</sup>とは大<sup>おほ</sup>きに違<sup>ちが</sup>ひ。手<sup>て</sup>がおもくれていかぬ。イエ。習<sup>なら</sup>ひ込<sup>こん</sup>で御<sup>ご</sup>ざります琴<sup>こと</sup>の音<sup>おと</sup>色<sup>いろ</sup>は又<sup>また</sup>格<sup>かく</sup>別<sup>べつ</sup>。憚<sup>はづか</sup>りながら今<sup>いま</sup>一<sup>ひと</sup>曲<sup>きよく</sup>。お聞<sup>かん</sup>カせなされて下<sup>くだ</sup>されと。くちく願<sup>ねが</sup>ふ折<sup>せ</sup>こそあれ。

御<sup>ご</sup>客<sup>きやく</sup>さふとほのめきて。兵<sup>ひやう</sup>庫<sup>く</sup>頭<sup>とう</sup>頼<sup>らい</sup>政<sup>せい</sup>の執<sup>しつ</sup>権<sup>けん</sup>競<sup>きやう</sup>瀧<sup>たき</sup>口<sup>くち</sup>。上<sup>じやう</sup>下<sup>げ</sup>モ立<sup>りつ</sup>派<sup>ぱ</sup>にいため付<sup>つけ</sup>け。顔<sup>かほ</sup>はしかみの上<sup>うへ</sup>人<sup>まゆ</sup>眉<sup>まゆ</sup>すてつぺいから爪<sup>つま</sup>先<sup>さき</sup>迄<sup>まで</sup>。理<sup>り</sup>屈<sup>くつ</sup>はつたる洪<sup>しやう</sup>紙<sup>かみ</sup>親<sup>しん</sup>仁<sup>に</sup>行<sup>ぎやう</sup>義<sup>ぎ</sup>。正<sup>ただ</sup>しく入<sup>い</sup>来<sup>き</sup>れば。跡<sup>あと</sup>にさがりて。おもはゆけに。秘<sup>ひ</sup>蔵<sup>ざう</sup>娘<sup>むすめ</sup>の権<sup>けん</sup>が。顔<sup>かほ</sup>を隠<sup>かく</sup>せし綿<sup>わた</sup>帽<sup>ぼう</sup>子<sup>し</sup>父<sup>ふ</sup>に伴<sup>ともな</sup>ふ取<sup>とり</sup>りなりもかいしよらしげな品<sup>しん</sup>かたち。おほこに見<sup>み</sup>へてかはゆらし。

姫<sup>こしもと</sup>共<sup>ども</sup>が取<sup>とり</sup>り次に阿<sup>あ</sup>栗<sup>くり</sup>は驚<sup>おどろ</sup>きさぐり出<sup>で</sup>。コレハく珍<sup>めづ</sup>らしや瀧<sup>たき</sup>口<sup>くち</sup>様<sup>さま</sup>。同<sup>どう</sup>じ源<sup>げん</sup>家<sup>け</sup>の家<sup>け</sup>臣<sup>しん</sup>なれ共<sup>ども</sup>。(三十一オ)お主<sup>おま</sup>がかはれば家<sup>け</sup>来<sup>き</sup>迄<sup>まで</sup>。いっお出<sup>で</sup>合<sup>あ</sup>も申<sup>まを</sup>さぬに。ふとした縁<sup>えん</sup>で一<sup>ひと</sup>家<sup>け</sup>の約<sup>やく</sup>束<sup>そく</sup>。他<sup>た</sup>人<sup>じん</sup>他<sup>た</sup>門<sup>もん</sup>の何<sup>なん</sup>ぞのやうに御<sup>ご</sup>案<sup>あん</sup>内<sup>ない</sup>とは叮<sup>てい</sup>嚙<sup>めい</sup>過<sup>か</sup>きた。マアお通<sup>とお</sup>りとおしらへば。御<sup>ご</sup>免<sup>めん</sup>シなれ御<sup>ご</sup>老<sup>らう</sup>母<sup>ぼ</sup>と。娘<sup>むすめ</sup>を連<sup>れん</sup>れて上<sup>じやう</sup>座<sup>ざ</sup>に直<sup>ただ</sup>り。仰<sup>おほ</sup>のごとく互<sup>あひ</sup>に面<sup>おもて</sup>は見<sup>み</sup>しらね共<sup>ども</sup>。聞<sup>きこ</sup>伝<sup>でん</sup>たる武<sup>ぶ</sup>勇<sup>ゆう</sup>の家<sup>け</sup>筋<sup>しん</sup>。殊<sup>こと</sup>に御<sup>ご</sup>末<sup>まつ</sup>子<sup>し</sup>志<sup>し</sup>内<sup>ない</sup>ノ六<sup>むつ</sup>郎<sup>らう</sup>景<sup>けい</sup>澄<sup>じやう</sup>殿<sup>でん</sup>。悪<sup>あく</sup>源<sup>げん</sup>太<sup>た</sup>義<sup>ぎ</sup>平<sup>へい</sup>とは乳<sup>ち</sup>兄<sup>けい</sup>弟<sup>てい</sup>。旁<sup>かたぐち</sup>以<sup>もつて</sup>瀧<sup>たき</sup>口<sup>くち</sup>が智<sup>ち</sup>に取<sup>と</sup>つて不<sup>ふ</sup>足<sup>そく</sup>なしと。文<sup>ぶん</sup>通<sup>つう</sup>を以<sup>もつて</sup>申<sup>まを</sup>かため祝<sup>しう</sup>言<sup>げん</sup>の吉<sup>きち</sup>日<sup>にち</sup>を。待<sup>まち</sup>ッ程<sup>ほど</sup>もなく都<sup>みやこ</sup>の騷<sup>さう</sup>動<sup>どう</sup>。事<sup>じ</sup>延<sup>えん</sup>引<sup>いん</sup>に及<sup>およ</sup>びしが最<sup>も</sup>早<sup>はや</sup>源<sup>げん</sup>平<sup>へい</sup>戦<sup>せん</sup>も治<sup>おさ</sup>り。左<sup>さ</sup>馬<sup>ま</sup>頭<sup>とう</sup>義<sup>ぎ</sup>朝<sup>ちやう</sup>公<sup>こう</sup>御<sup>ご</sup>親<sup>しん</sup>子<sup>し</sup>共<sup>ども</sup>に敗<sup>はいて</sup>北<sup>きた</sup>なれば。智<sup>ち</sup>殿<sup>でん</sup>も嘸<sup>さ</sup>凱<sup>かい</sup>陣<sup>じん</sup>ならん。時<sup>とき</sup>分<sup>ぶん</sup>シがらの娘<sup>むすめ</sup>此<sup>こ</sup>方<sup>かた</sup>に預<sup>よ</sup>り置<sup>き</sup>。迷<sup>めい</sup>惑<sup>わく</sup>に(三十一ウ)存<sup>ぞん</sup>るから押<sup>お</sup>シて同<sup>どう</sup>道<sup>だう</sup>致<sup>ち</sup>したり。婚<sup>こん</sup>礼<sup>れい</sup>なされ下<sup>くだ</sup>されと慇<sup>いん</sup>勤<sup>きん</sup>にこそ述<sup>の</sup>にける。ヤレく夫<sup>そ</sup>レはお嬉<sup>うれ</sup>しや。そふ奥<sup>おく</sup>底<sup>てい</sup>のないでこそほんくの真<sup>しん</sup>味<sup>み</sup>なれ。併<sup>しかし</sup>兄<sup>けい</sup>の紀<sup>き</sup>平<sup>へい</sup>治<sup>ち</sup>も六<sup>むつ</sup>郎<sup>らう</sup>もまだ凱<sup>かい</sup>陣<sup>じん</sup>を致<sup>ち</sup>



さぬが。弥噲に違ひもなう義朝公の負軍か。成ル程く鬼神ミと呼ばれし悪源太義平公。二条川原において討死めされ。御首は難シ波次郎経遠が討取ツたりと。聞クより阿栗は大きに仰天。ナニ源太様は討死とや。ハツはつと計に腰もぬけ。暫し涙にくれるが。

軍の勝負は時の運負るが恥でもなき物を。血気にはやる御大将深入しての討死か。エツエ仕なしたりく。といふて今さら返らぬ事悔まじ(三十二オ)歎くまじ。せめてふたりの子供等が無事に戻つてつてくれよかし。早う逢たや恋しやとそゝろに案じる親心。權は傍に寄。私はお前の嫁でござります。遠からの御契約なせ軍にござらぬ内。呼迎へては下さんせぬ。若討死でもなされたら一生殿御のはだへもしらず。後家にするお心か聞へませぬと取り付いて打恨たる気色也。

ヲ、道理く是は母が誤った。其詫は戻り次第第六郎にさせませう。瀧口様も折角お出。祝言の寿を見ずにお帰りなされるも気の毒。二三日は御逗留遊ばせ。其間には六郎も立帰るでござりませう。權そなたも奥へ同道休足仕やと有りければ。イエくかう参るから(三十二ウ)は大事のか、様。お目の不自由な御介抱わたしが致さにや成りませぬ。爺様計り奥へいて。少お休と氣を付ければ。ヲ、嫁する時は其父母に仕るが肝要。けふより我れは他人も同然。御老母へ宮仕へ片時もお傍を離るゝな。ヤイ家来共。其挾箱は所持。ハツト下モ部がかき上クれば瀧口小脇にしつかと挾。智引出は六郎に對面したる上の事。老足の労も有レは暫く一ト間にくつろぐへし。後刻くと姦が案内に連れて入にけり。

程もあらせず表テの方紀平次様の御シ入りと。取り々しらせる下モ部に引連。宿所へも立帰らず旅装束を其儘に。母の御顔見まはしく直に是迄紀平次が。唯今凱陣致せしと。いふ声聞いて母は悦。(三十三オ)ヤレく子供より戻りしな。何ンと

して遅かりし六郎も一ツ所ならん。是に居やるは嫁の<sup>あさがほ</sup>。たつた今瀧口様が連レ立ッてお出なされ。待兼た<sup>どう</sup>胸ぶくら。早速<sup>さうぞく</sup>女夫の<sup>なづき</sup>盃と言たいが先ッ何かは指置<sup>さし</sup>て。氣にかゝるは義平様の御最期<sup>さいご</sup>。先<sup>さき</sup>達ッて聞つるが人の<sup>うはさ</sup>噂に違ひはないか。ど<sup>ち</sup>ふじやと尋<sup>たず</sup>られ弟六郎景澄は。御<sup>う</sup>命にかはりしと申上人も<sup>かげすみ</sup>。御<sup>お</sup>傍を離<sup>はな</sup>れぬ上母の歎<sup>なげ</sup>きを思ひやり。ハツト計に返答<sup>へんたう</sup>は涙にくれて居たりける。

<sup>地位ハル</sup>。權は夫の顔早う逢<sup>あひ</sup>たさなつかしさ。申<sup>こ</sup>し紀平次様とやら。私はお前の弟嫁でござんす。六郎様はなぜにお歸りなされぬへ。<sup>地ハル</sup>。ほんに又主シもぬし。いかに顔を見しらぬ<sup>いひなづけ</sup>言号の女房が。来<sup>地ハル</sup>て居よる共思しめさずどこに何してご(三十三ウ)ざるや<sup>ウ</sup>。お氣の付<sup>ツ</sup>かぬ事では有<sup>ハル</sup>と。母にしらせる<sup>フシ</sup>壁訴訟<sup>かきそそ</sup>。ヤア六郎は戻<sup>もど</sup>らぬとや同道はせざりしか。道にばしおくれたか心元<sup>もと</sup>なや氣づかひと。あせれば猶々<sup>とうわ</sup>当話も出ず。イヤ追ッ付<sup>お</sup>ケ只今と紛<sup>まぎ</sup>らす所へ。<sup>地ウ</sup>。悪源太義平公常世の前を誘<sup>いざな</sup>ひて。来<sup>ハル</sup>かゝり給<sup>う</sup>ふを紀平次が見るよりちやくと走<sup>はしり</sup>寄。姫を小<sup>こ</sup>かけに忍<sup>しの</sup>はせ置<sup>お</sup>キ御耳際<sup>みみぎは</sup>に口<sup>くち</sup>を寄<sup>よ</sup>せ。さゝやく内に<sup>あさがほ</sup>。權は。聞<sup>ハル</sup>キしに違<sup>ちが</sup>はぬ年<sup>とし</sup>シ<sup>ハル</sup>。恰<sup>かつ</sup>好<sup>こう</sup>振分<sup>ふりわけ</sup>の義平公。我<sup>わ</sup>夫なりと思<sup>おも</sup>ひ詰<sup>つめ</sup>申<sup>こ</sup>し母様六郎様が今お歸りなされたと。聞<sup>地ハル</sup>に驚<sup>おどろ</sup>く主従<sup>しうじゆ</sup>が兎<sup>と</sup>やせん角<sup>かく</sup>やと氣もいら<sup>フシ</sup>ち。うろくとしておはします。

<sup>詞</sup>。ドレ戻<sup>もど</sup>り(三十四オ)つたら爰へこよ。いひたい事聞<sup>きこ</sup>たい事。胸の内には百<sup>ひやく</sup>千<sup>せん</sup>万<sup>まん</sup>。ナアく早<sup>はや</sup>うとせき立<sup>た</sup>れば是<sup>ぜ</sup>非<sup>ひ</sup>に及<sup>およ</sup>ばず御大將。老母<sup>らうぼ</sup>が心をなだめる為<sup>ため</sup>志<sup>し</sup>内<sup>うち</sup>ノ六郎景澄と。紀平次が取次<sup>とりご</sup>キにて小腰<sup>こし</sup>かゝめて出<sup>で</sup>給<sup>たま</sup>ふを。權は一<sup>ハル</sup>ツ心不<sup>ふ</sup>乱<sup>らん</sup>夫と心得<sup>こころえ</sup>御<sup>か</sup>顔<sup>は</sup>に。眺<sup>う</sup>入<sup>ながめ</sup>たる恋<sup>こひ</sup>の坂登<sup>のぼり</sup>詰<sup>つめ</sup>たる嬉<sup>うれ</sup>しさも。後<sup>のち</sup>の歎<sup>なげ</sup>きの種<sup>ね</sup>ならん。ドレ<sup>詞</sup>近<sup>ちか</sup>うよれ用<sup>もち</sup>有<sup>あ</sup>と探<sup>たず</sup>り寄<sup>よ</sup>つて義平<sup>ハル</sup>の。御<sup>も</sup>髻<sup>むす</sup>を手に<sup>なごみ</sup>からまき老<sup>う</sup>の力<sup>ちから</sup>も腕<sup>うで</sup>限り。ゾツト引<sup>ひ</sup>よせ引<sup>ひ</sup>居<sup>す</sup>る。コハ何<sup>なん</sup>ゆへと両<sup>りやう</sup>人が。手<sup>て</sup>に絶<sup>た</sup>れば突<sup>つ</sup>退<sup>たい</sup>く身<sup>み</sup>を震<sup>ふる</sup>はし。涙<sup>なみだ</sup>も交<sup>まじ</sup>るしはがれ

声。ヤイ爰な人でなし。其未練な根性で中々母がいふ事を。尤とは（三十四ウ）思ふまい去ながら。少シでも魂が有るならば耳をさらへてよう聞おれ。義平公には此母が産家の内よりお乳を上ケまし。御育申せし故外ならず思召シ。勿体なや乳兄弟とて志内といふ苗字を下され。各別にお取り立歴々の御家臣並。此度の着到にも。五番と跡へさがらぬは。皆源太様の御恩にあらずや。其君が討死なされ口惜や難波づれに。御首を取られ給ふ。御無念さと思ひやらず。敵さへ討ツ事かすごとくと逃歸り。どの面さげて此母に対面をせうとは思ふ。業さらし恥しらず。切刻でもあきたらぬ大腰ぬけ。儕レがまめで戻らふより死ンで死骸（三十五オ）が戻つたら。老の身の喜びは。何程で有ルべきぞ。

憎うてならぬと引しやなぐり。打つ擲つ突飛し。怒の涙はてしなき心の。内ぞいたはしき。紀平次は最前より主君ンとしらで老母が慮外。勿体なや恐ろしやと立寄ルを義平公。御ン目くはせにて押シとめ。忠義一途の一一言に深く感ぜし御ン有様。母の教訓權が身にもこたゆる悲しみの。指うつ。むいて居たりしが。お袋様のお腹立さら／＼御無理はなけれ共。死スる計りが忠義でも孝行でもござんすまい。命を捨てに恥辱もすゝぎ御機嫌の直る様に。分別して下さんせと。我夫ならぬ夫ぞとはしら（三十五ウ）で案じる氣あつかひ。縋り歎けば紀平次も。義平公も氣の毒の顔をそむけておはします。

老母は猶もはりつよく。ア、嫁御寮のあまぢや、な氣遣ひがり。あいつが兄に紀平太とてモひとり大きなあほうが有ル。過行れた旦那殿がとうに勘当して置かれた。そいつにはまだどこやらに侍いくさい所も有レド。兎角あいつは臆病者。恥をかいても不忠に成ツても。死るやうな立派な性根さげるやつじやござらぬ。親兄弟の面よごしとつと、出て行ケ子でないぞ。エ、おまへあなたを追出し。わたしはどうして下さんす。ハテわしが大事の嫁。親や女房に機嫌よう添たい（三十六

オ)といふ心が付つきき。お主の御恩を報ほうずる程の手柄てがらさへ見るならば。誰わか詫言ことより挨拶あいさつより。是に越こしたる孝行かうくもござるまい。夫婦夫婦いもせの盃さかづきはそれ迄母が預あづかつて。嫁よめ姑しよめやあいやけ同とし士。膝直ひざをしの盃さかづきせう。した調が親子兄弟あひなでも武士あひなは恥有恥る物。かうした訳わけを瀧口様へ隠して互いいに打うちにつこり。女子こし共に琴弾ことひかせ酒事さけこと始はじまへと。うかぬ娘をむりやりに。勝かつ手覚おぼへし奥の間へ引連ひつれてこそ入いにけれ。

常世とこよの前も。小ちかげにて。老母うの腹立はらちた権けんが。詮せんなき歎なげきに走はり出。おふたりの心根こころがわしやいというてさつきにから。泣てばかり居たはいな。とても一ひと度どは知しれる事いつそ(三十六ウ)様子を打明うちけて。とくどうをさせますやうになされたらよ色かるそへ。イヤ詞くそれは遅おそからず。権が父瀧口。院の御所へ御味方みかた致したる頼政かみが家臣かしんなれば。君御存命きみごんにまします事。白地あからまには申まがたし。何事なんじも此紀平次に任せ置まき先ツ々一ひと間に御入ごりと。申ま上あれば義平公。良御涙やうに。くれさせ給たまひ。孟母もうぼは三度隣となりをかへ。子に教おしをなすいつくしみ。王陵わうりやうが母の義心ぎしん迄思おもひ出して日の本うの。烈婦れつふといへるは汝等が母の阿果あぐ。かゝる血筋ちぢんを請うけたる六郎。源太が命にかはりしとは露いろいさ、かもしらされば。不忠者ふしうとて憤いきどるは理ことりなり去ながら。死しだと聞きかば恩愛おんあいに(三十七オ)ひかれて迷まよふは親のならひ。権といひ母といひ嘸さや歎なげかん不便びんやと。古今こゝん名譽めいよの勇将ゆうしやうと呼れ給ひし義平の。むせび入たる御風情おふぜい有りがたし共忝めうし共。冥加めうか涙に紀平次は。伏拝ふしおがみく暫しばし。泣入なみ計りなり。漸だ御ご目めをはらはせ給ひ。不覚ふかくの歎なげきに某たれが存ぞん命めいイを人しらば。命を捨すて六郎が志こころも立たがたし。兎うもかうも思案しあんを極きよくめ姫が身の上みに頼たのん。こなたへこよと宣のたまひて。ふたりを誘いざなひしづくと障子しやうじのへ内へ入給ふ。恋うといふ。其曲物そのまがものの。なかりせば。人の誠まことはしれまじと。書つき伝たへたる権は。日ひかけ待まちつ間の契けり共。しほくとして忍しのび

出。お袋（地中）（三十七ウ）様の御（ハル）情忝（中）い事ながら。流浪（ウ）なさるゝ、六郎様を何（ハル）と見捨て置かれうぞ。わたしも一ッしよに出て行覚悟（中）。跡でしかつて給はるなとなく／＼一ト間に。指（ア）かゝれば。

しめやかなる女（ウ）の聲。コハ心得ずと障（ハル）子の内。覗（のぞ）くあなたに義平公。常世（トコヨ）の前と指（中）向ひ。耳（みみ）をすませば泣声（色）にて。譬何国（詞）の浦迄も離るゝ事はわしいや／＼。連（ハ）れていて下さんせと。縫（地）り付（ハ）く体（てい）見るより悔（ひ）り。ヤアあの女（女）は。いつの間にどこから来た。あたいやらしいあつかはなと。氣もせき登る胸（のほ）の積（しやく）。押（お）して内へもはいられず。奥へも行れずうろ／＼と。前（前）に後涙（ハ）にくれるが。エ、聞（ハ）へませ（三十八オ）ぬ六郎様。言号（いひなづけ）の事なれば御凱陣（かいちん）なさるゝと。嫁入（よめいり）するはしれた事。いかに殿御（つ）のかうけじやとて。是見（ウ）よがしにどうよくな。不覚（ウ）を取（ウ）つて母御様の。お呵（しかり）を請（ウ）ケ給ふも大方其女中（ウ）ゆへでござんしやう。心（上）づよやと打伏（中）て。泣沈（中）みたる折こそあれ。

奥（地色）の座敷は賑（にぎ）はしく。音（ハ）もさへ渡る玉琴（こと）に。哥（ウ）のしやうがも身にしみて。あさましや。いつの。世（ハ）にかは。わすれん。アノ哥は雪のあした。葵（あひ）の上の怨霊（おんれい）。御息所（みやす）を悩（なや）せし恐ろしき一ト手にて。葵（あひ）の曲（きま）共名付（な）けたり。いか様（ハ）わしもあそこへ踏（ふ）込（こ）。恨（うら）のたけをいふてのけふか。イヤ／＼それでは奥へ聞へ。猶も（三十八ウ）夫の為ならずと。心（地）一トつに納（おさ）れば。又うたひ出す浮世哥（上）。いつそ此身（二）は。消（中）なばきへね。生（ハ）きて添共（そふ）。面白（おも）からぬ。ヲ、ほんに思へばそふじやなア。昔唐土（むかしもちうこし）にひとりのおのこ。他国（たこく）へ軍に出たる跡。其母妻（つま）を迎へ置（お）く。程過（よめ）きて嫁の女房野辺（のべ）に出て菜摘（なづみ）をせしに。旅人の返り合せ無理（む）無体（たい）にたはむれしを。振切（は）つて立帰る。しばらくして彼旅人（かの）。此家（この）に来るを母に聞（き）け。いひ号の我夫（わが）なり。永々古郷（ながくこきやう）の母女房待（まち）焦るとはしらずして。我を外の女と思（おも）ひ色をしかけし悪性者（あくせやうもの）。聞（き）こへぬ男と自害（じがい）して夫を諫（いさめ）し例（たと）もあり。

(三十九オ) 自<sup>みづから</sup>が今の身も是<sup>こゝ</sup>にかはりし事はなし。死て夫<sup>いさめ</sup>の諫<sup>かぐこ</sup>にと。覚悟極めし懷<sup>ふところ</sup>刀。抜<sup>は</sup>くより早く我<sup>われ</sup>と我<sup>われ</sup>カ。咽<sup>のうど</sup>にがはと突<sup>つ</sup>立<sup>た</sup>てて。ハツト玉<sup>たま</sup>ざる一ト声に。一ト間の内より主<sup>しゅ</sup>従<sup>じゆ</sup>三人。としや遅<sup>おそ</sup>しとかけ出れば。母<sup>う</sup>も奥<sup>おく</sup>より転<sup>ま</sup>び出。コハ何ゆへの自<sup>じ</sup>害<sup>がい</sup>ぞと。尋<sup>う</sup>られても此<sup>こ</sup>場<sup>ば</sup>のしぎ。いは一<sup>ち</sup>倍<sup>ばい</sup>憎<sup>にく</sup>しみの。か、らん物と今<sup>いま</sup>端<sup>は</sup>迄<sup>ち</sup>取<sup>ちか</sup>違<sup>へ</sup>たる夫<sup>つま</sup>思<sup>おも</sup>ひ。コレハく<sup>と</sup>と計<sup>け</sup>りにて泣<sup>な</sup>より外<sup>ぐわい</sup>は苦<sup>くる</sup>しみの。血<sup>ち</sup>汐<sup>しほ</sup>に争<sup>あらそ</sup>ふ涙<sup>なみだ</sup>なり。

父<sup>ちち</sup>の競<sup>き</sup>瀧<sup>たき</sup>口<sup>くち</sup>は襖<sup>ふすま</sup>の内より歩<sup>あゆ</sup>出。今<sup>いま</sup>相<sup>あひ</sup>果<sup>は</sup>る娘<sup>むすめ</sup>なれば何<sup>なん</sup>程<sup>ほど</sup>の一<sup>いち</sup>大<sup>だい</sup>事<sup>じ</sup>も。他<sup>た</sup>言<sup>ごん</sup>すべき余<sup>よ</sup>命<sup>めい</sup>はなし。子<sup>こ</sup>細<sup>さい</sup>を打<sup>う</sup>明<sup>めい</sup>ヶ湛<sup>たん</sup>納<sup>なう</sup>させ。未<sup>み</sup>来<sup>らい</sup>も迷<sup>まよ</sup>はず一<sup>いつ</sup>ト筋<sup>すぢ</sup>に。(三十九ウ) 成<sup>じやう</sup>仏<sup>ぶつ</sup>させて下<sup>くだ</sup>されと。いふに人<sup>ひと</sup>々<sup>々</sup>驚<sup>おどろ</sup>く内。老<sup>ちゆう</sup>母<sup>ぼ</sup>は一<sup>いつ</sup>ト間<sup>かん</sup>の仏<sup>ぶつ</sup>壇<sup>だん</sup>より。一<sup>いつ</sup>トつ<sup>の</sup>位<sup>ゐ</sup>牌<sup>はい</sup>を探<sup>さぐ</sup>出し。しほれか、りし權<sup>けん</sup>が。前<sup>まへ</sup>にすへ置<sup>お</sup>キ涙<sup>なみだ</sup>をながし。コレ嫁<sup>よめ</sup>御<sup>ご</sup>。そなたの夫<sup>おとこ</sup>ト志<sup>し</sup>内<sup>ない</sup>ノ六<sup>ろく</sup>郎<sup>らう</sup>影<sup>かげ</sup>澄<sup>じやう</sup>は爰<sup>こゝ</sup>に居<sup>ゐ</sup>る。それにお渡<sup>わた</sup>りなさる、は惠<sup>ゑ</sup>源<sup>げん</sup>太<sup>たい</sup>義<sup>ぎ</sup>平<sup>へい</sup>様。殿<sup>だん</sup>御<sup>ご</sup>が違<sup>ちが</sup>ふたこなたへと。思<sup>おも</sup>ひも寄<sup>よ</sup>ぬ一<sup>いつ</sup>言<sup>ごん</sup>に。手<sup>て</sup>負<sup>お</sup>うは悔<sup>おひ</sup>り紀<sup>き</sup>平<sup>へい</sup>次<sup>じ</sup>も。仰<sup>かう</sup>天<sup>てん</sup>ながらコ<sup>こ</sup>レ母<sup>ぼ</sup>人<sup>にん</sup>。それは何<sup>なん</sup>を御<sup>ご</sup>意<sup>い</sup>なさる、。イヤもふどふも隠<sup>かく</sup>して居<sup>ゐ</sup>られぬ。スリや我<sup>われ</sup>君<sup>きみ</sup>の御<sup>ご</sup>安<sup>あん</sup>体<sup>たい</sup>様<sup>やう</sup>子<sup>こ</sup>具<sup>ぐ</sup>に御<sup>ご</sup>存<sup>ぞん</sup>ジカ。ヲツヲ道<sup>みち</sup>法<sup>のり</sup>は纔<sup>わづか</sup>四<sup>し</sup>里<sup>り</sup>半<sup>はん</sup>。大<sup>だい</sup>切<sup>せつ</sup>ッな養<sup>やう</sup>君<sup>きみ</sup>。殊<sup>こと</sup>に六<sup>ろく</sup>郎<sup>らう</sup>景<sup>けい</sup>澄<sup>じやう</sup>が。初<sup>はつ</sup>陣<sup>じん</sup>の御<sup>ご</sup>供<sup>く</sup>なれば。風<sup>かぜ</sup>の吹<sup>ふ</sup>にも心<sup>こゝろ</sup>を付<sup>つ</sup>ケ待<sup>たい</sup>賢<sup>けん</sup>門<sup>もん</sup>の軍<sup>いくさ</sup>の次<sup>つぎ</sup>(四十オ) 第<sup>だい</sup>。景<sup>けい</sup>澄<sup>じやう</sup>が御<sup>ご</sup>命<sup>めい</sup>にかはりし迄<sup>まで</sup>。事<sup>こと</sup>こまかに聞<sup>きこ</sup>計<sup>けい</sup>リか。何<sup>なん</sup>ンば目<sup>め</sup>か<sup>い</sup>が見<sup>み</sup>へぬとて。七<sup>しち</sup>夜<sup>や</sup>の内より抱<sup>だ</sup>か、へ。育<sup>そだ</sup>上<sup>たて</sup>參<sup>ま</sup>らせし若<sup>わ</sup>君<sup>きみ</sup>と。我<sup>われ</sup>カ血<sup>ち</sup>を分<sup>わ</sup>けし六<sup>ろく</sup>郎<sup>らう</sup>を。取<sup>ち</sup>違<sup>へ</sup>てよい物<sup>もの</sup>か。畳<sup>たたみ</sup>ざはりの御<sup>ご</sup>足<sup>あし</sup>音<sup>おと</sup>。お髪<sup>かみ</sup>へちよつとさはつても。義<sup>ぎ</sup>平<sup>へい</sup>公<sup>こう</sup>とはしつたれど。奥<sup>おく</sup>には競<sup>き</sup>瀧<sup>たき</sup>口<sup>くち</sup>殿<sup>だん</sup>。傍<sup>そば</sup>には嫁<sup>よめ</sup>の權<sup>けん</sup>が。夫<sup>おとこ</sup>トと思<sup>おも</sup>ひ詰<sup>つ</sup>たるこそ。御<sup>ご</sup>シ名<sup>な</sup>を包<sup>つむ</sup>に能<sup>よ</sup>方<sup>はた</sup>便<sup>でん</sup>と。我<sup>われ</sup>レも一<sup>いつ</sup>ぱい喰<sup>く</sup>た体<sup>てい</sup>。勿<sup>な</sup>体<sup>たい</sup>なや恐<sup>おそ</sup>ろしや。お主<sup>う</sup>様<sup>やう</sup>を打<sup>うち</sup>手<sup>て</sup>擲<sup>ちやく</sup>。心<sup>こゝろ</sup>の内では天神<sup>てんしん</sup>シ地<sup>ち</sup>祇<sup>ぎ</sup>。日<sup>にっ</sup>本<sup>ぽん</sup>シ国<sup>こく</sup>の神<sup>かみ</sup>仏<sup>ぶつ</sup>に。お詫<sup>わ</sup>び申<sup>まを</sup>て。居<sup>ゐ</sup>たりしそや。それ<sup>それ</sup>にまだ笑<sup>せう</sup>止<sup>し</sup>なは今<sup>いま</sup>此<sup>こ</sup>子<sup>こ</sup>細<sup>さい</sup>を打<sup>う</sup>明<sup>めい</sup>ヶと。心<sup>こゝろ</sup>のかたい瀧<sup>たき</sup>口<sup>くち</sup>様。顔<sup>かほ</sup>さへしらぬ男<sup>おとこ</sup>の為<sup>ため</sup>。若<sup>わ</sup>いあの子<sup>こ</sup>をいかす後<sup>ご</sup>家<sup>け</sup>。尼<sup>あま</sup>に(四

十ウ)でもさつしやるは必定。六郎にあいそをつかさせ。里へ帰て外カ々へ緑付キをさせう物と。情がかへつて怨と成り。死て貞女を立る氣に。何と。包んで居られうと。誠をあかす老母の歎。父も涙のまぶたをはらひ。娘あれをよう聞たか。そちが夫ト景澄は。天笠震旦我カ朝にも。比類なき忠臣也。かゝる健氣の夫トに添は。女たる身の仕合ぞや。さは去ながら今生にて。一チ日片時の交りなく。位牌に成った智殿と西方浄土へ載入する。はかない縁を人々にも。不便がつて下されと。堪兼たる溜涙漲り落る瀧口が袖は溯瀬とかはりける。

義平(四十一オ)夫婦紀平次も子を先キ立ツる親々の。歎キを察し諸共に。むせび入たる御涙今端の極目をひらき。傍なる位牌を膝に乗。ア、有がたや嬉しやな。臆病未練の夫トを諫。悲しい死をするのかと。何ンほう胸を痛しに。出かさしやんした六郎様。と、様やお袋様シガ。大分ン誉てござるぞへ。こんな殿御を持つわしは。人に勝れた果報者。逆の事に女房かと此世でたつた一ト言の。お詞をかはされぬか。テモ物いはぬお方じやと。位牌を身に添抱しめ。絶入ル息の下よりも。くどき歎けは。道理じやく。年シ寄つてさへ夫トに離れ。後家に成ル身は悲しい物。水の出花が今咲ク花。苔の顔も見ぬ夫ト。(四十一ウ)別れた上に死で行。よくく因果な縁を組。あぢきない事聞ク母が。心の苦しさをいかに計りとか思ふらん。朝晩の看経も仏に向へばわが子の事。思ひ出してたまらぬ故。いけもせぬ琴を弾。紛らかして居たはいのふと。身もだへたるさけび泣。皆身にかゝる涙の雨しほらぬ。袂はなかりける。

紀平次はつと心付キ。君御在世の御事を。深く包むは時節を待チ味方の臍をかためん為。かく露頭に及ぶ上少シも猶予成りたしと。いはせも果す。ヲツヲ、、、、いしくも紀平次申シたり。是より都へ取つてかへし主従二(四十二オ)人六波羅

の。館へ切り入清盛父子が首取ルか。運尽なば討死して今の恥辱を雪べしいそふれやつと。勇氣の大將。かけ出さんとし給へば瀧口しばしと呼とゞめヤレ待ち給へ。篋忽々。御存命を能クしつたる。娘は今が四苦八苦。死残りたる此親仁も。頼政といふ主なければ。他言せまじき誓の爲。腹かつさばいて見すれ共。それは益なき不忠の最期。真実人に吹聴せぬ誓言には。さいつ比子安の堂にて盗賊が。盗取つたる養錢箱。疑念の晴る御饒別と。立寄つて挾箱。蓋を明ければ牛若丸立出給ふ御姿。コハ(四十二ウ)めづらしき対面と。義平公も紀平次も。歎きの中の悦びは。尽ぬ名残をふり捨て。お暇申ス。瀧口が泣ぬぞ泣にます鏡。影を見送る様は。露もかはかでしいほりと。しばみ切たる玉の緒や。つながれ寄たる縁組に。嫁御の輿は来世迄。すぐに送りし門の火も。葬礼の火と消残る。煙くらべん。鳥辺山。世はあだしの、手向草。老たる者はとゞまりて若木の。花の先立ツも。仏のしめし置かれたる。老生不定是なりと。有為転変の有様を。さとり。く

て立別れ都の。空へと帰りける(四十三才)

### 第三

輶斗水を得て九流に鱗を奮ふ。志を得る者は其勢に乘ルにしかずとかや。安芸守平の清盛待賢門の軍に打勝。義朝一ツ家を爰かしこに切取り。或は生捕かけ落トし自然と宇宙を掌に握り。威勢万里に搏て飛大鵬の沖がごとく。猶も源家の残党を草を分ツてせんさくせんと。六波羅の記録所に主馬ノ判官盛久を始め。相伝恩顧の諸士をあつめ評議。取り々区々也。年木わる。老の姿も。(四十三ウ)三つ輪くむ。花の帽子も水色の。濁にそまぬ蓮葉や。

池の禪尼は附キ々の女房達チに案内させ。しづくと入給ひ。此度の戦ひに源氏の家門ちりぐに落行し其中に。兵衛ノ佐



頼朝を。弥平兵衛宗清が召捕し由先達で聞しが。其頼朝は過行しそなたの弟家盛に。面ざし恰好生うつしとの取沙汰。聞ヶズ恋しさなつかしさ。我子がふたゝび蘇生逢と思へはおのづから。日比のうさも悲しさも忘れて心慰たし。一ト目達せて給はれと余義なき願ひ一筋に。思ひ入たる御風情。清盛眉間に皺をよせ。人相がよく(四十四才)似たればとて。朝敵の義朝が駈。御対面有つてしぜん不便の御志も出なば。殺すにも殺されず。助おかば後難も計りがたし。此義は御無用くとりあへ給はぬ一ト口返答。にがり切つたる顔眺め。是迄そなたに此母が。何かに付けて一チ言も願ひし事はなけれ共。子故に迷ふ親心。譬不便をかけたたり共さのみかいにも仇にもならふか。年寄つたれば侮つて子とても用ひぬ我カ願ひ。もふ言ますまい是切りく。姉共サア供せいと。立帰らんとし給へばア、暫くく。さほど迄思し召シ入れし事達でとむるも心よからず。暫時の対面苦しかるまじ。ヤアく者共。(四十四ウ)獄屋へ参り頼朝を目通りへ引出せ。ハット答て下モ部共御前ンを立て急行。

時しも有レ難波ノ次郎経遠。懸烏帽子に大紋袴。さはやかに出立ッて御前に畏り。尾張国の住人長田ノ庄司忠宗。義朝を討チ取り則チ首持参仕り。お次きにひかへ罷り有と器を御前ンに直し置キ。急ぎ忠宗を召シ出され。御恩賞遣はされ然るべし。古今無双の義朝なれば。風呂屋の内にて討ッたる次第大略咄し承りしが。比類なき働中々詞に尽されずと。むしろやうに肩持鬚臙口したり顔に相述べ。

禪尼引取り。イヤ其長田手柄にあらず。三代相伝の主(四十五才)を殺し。褒美を食る大悪ク人。清盛の前へ呼出す事無用。其儘置クに追ッかへせと。気色かはつての給へば。イヤ是は尼公の仰共存ぜず。かほどの高名に御褒美を遣はされずば。



られ。粟田口にて、鍔を抜捨。血を洗ふて保養すれ共、痛手なれば叶はず。終に青墓の宿にて生害す。まつた義朝は尾張ノ  
国野間の内海にて。長田ノ庄司が討たれ共。心がゝりは悪源太汝がしらざる事有まい。是非いはねば目通りで拷問する。ナ  
ア何とくと怒の面色。息烟立て波間をあばきつらぬく筋骨凹凸せり。(四十七才)